

全譯上首弟子物語

東 元 慶 喜

まえがき

この翻譯はダンマパダ Dhammapada (法句經)のヤマカ・ワツガ Yamaka-vagga (双品)中の第一一偈・第二二偈の二偈にからまる物語である。上首弟子というのは法將サーリプッタ Sāriputta (舍利弗)と神通第一といわれるモツガッラーナ Moggallāna (目犍連)のことである。

この書物の名はダンマパダッタカター Dhammapadatthakathā (法句義釋)である。筆者は、マガダよりセイロン島に渡つたブツダゴーサ Buddhaghosa (佛鳴)と伝えられる。西曆四五世紀のものである。佛陀存命の時代から八百年ばかり経過しているので、描寫にリアルでない、神祕的・超自然的なところがないわけではないけれども、それでもなお、古代人の心理、當時の地理・風俗などこまかに描き出して、今日のわれわれを佛陀のみまえに導き出してくれるようなところがする。

譯者が使用した原本はハリー・キャンベル・ノーマン Harry Campbell Norman 氏(一八七八—一九一三)氏が一九〇六年より一九一四年までかかつてローマ字に轉寫校訂して刊行したものであり、五卷よりなる。

譯者はさきに三省堂よりこのうち數篇をえらび出して縮譯し「法句經物語」として出版し、また國際佛教協會機關誌「海外佛教事情」ならびに雑誌「新亞細亞」に第一話「チャックパーラ長老物語」・第二話「マッタクンダリ物語」・第三話「肥滿ティッサ長老物語」等を次々に全文譯出して發表したが、それらは悉く戦災で焼失してわたくしの手もとにはない。

いまここにとりあげたアツガ・サーワカ・ワットウ Agga-sāvaka-vatthu (上首弟子物語)は「法句義釋」の第八話であり、譯者が昭和三十四年十二月より駒澤大學學生のために講義しているものである。

本文はまず佛陀の傳記を略述し、佛陀よりは年長者であつ

たサーリプッタ・モッガッラーナの二求道者が、幼少時代・青年時代を経て、ついに歸佛するに至るまでのいきさつを、こまかに敘述している。

佛陀傳の部分は筋を追うのに忙しくて、きわめてあらいたツチである。また文章も連續體が多くて、齒切れがよくないように感ぜられる。しかし譯者は原文と對照してよむ年若い讀者を豫想して、できるだけ原文に忠實に譯出したので、この佛傳を略述した部分は日本文としては甚しい惡文の如く思われるであろうが、おゆるしをねがいたい。

この上首弟子物語の譯文はドクター・オブ・フィロソフィー故立花俊道師存命のみぎり、その膝下において譯出したものに手を加え、さらにハーバード・オリエンタル・シリーズ Harvard Oriental Series 第二八巻中のユージェーヌ・ワトソン・バーリングゲーム Eugene Watson Burlingame 氏の英譯をも參考にした。

なお昭和三十四年十月より十二月にかけて、駒澤大學の學生のためにパーリ語の演習として講義した法句義釋第五話コーサンバカ・ワットゥ Kosambaka-vatthu（コーサンビー住比丘物語）は大阪四天王寺機關誌「四天王子」昭和三十五年一月號に掲載のほずであるから、あわせてごらん願いたい。

（昭和三十四年十二月十日譯者記す）

本文

「本質ならぬを本質と思ひなして」とこの說法を師（佛陀）はウェールワナ（竹林）〔精舍〕に住まわれつつ、上首の弟子によつて述べられたサンジャヤ（刪闍耶）の來ないことについて語られた。

これはそこにおける次第説話である。われらの師（佛陀）は四阿會祇十萬劫のそのむかし、アマラワティー城において、スメーダ（善慧）という婆羅門の少年であつて、あらゆる學藝の奧義に達し、父母がなくなつたので數千萬を算する財寶を捨てて、仙人道に出家して、ヒマラーヤ（雪山）に住まいつつ、禪定・神通力を得て、空を行きながら、ディーパンカラ（燃燈）十力（佛）がスダッサナ（善現）精舍からランマの都におはいりになるために道路を淨めているのを見て、自分もまた一部を受持つて、かれが淨め終らぬうちにおいてになつた師（ディーパンカラ佛）のために、自身を橋にして泥の上を覆い、「師よ、お弟子衆とともに泥をふまないで、わたくしをふんで行かれますように」と身を伏せた。師はそれを見て、「この者は覺者の芽である。未來四阿會祇十萬劫の終りにおいて、ゴータマ（瞿曇）と名ずける佛陀となるであろう。」と記別を授けた。

かの「ディーパンカラ」佛のあとに、コンダンニヤ（橋陳

如)・マンガラ(吉祥)・スマナ(善意)・レーワタ(離婆多)・
ソーピタ(所照)・アノーマダッシー(高見)・パドウマ(蓮
華)・ナーラダ(那羅陀)・パドウムッタラ(蓮華上)・スメー
ダ(善慧)・スジャータ(善生)・ビヤダッシー(喜見)・アッ
タダッシー(義見)・ダンマダッシー(法見)・シッダッタ(悉
達多)・ティツサ(帝沙)・ブツサ(報沙)・ウイパッシー(毘
婆尸)・シキー(尸棄)・ウエッサブー(毘沙浮)・カクサンダ
(拘留孫)・コーナーガマナ(俱那含)・カッサパ(迦葉)と世
界を輝していでたまえる、これら二十三佛のもとに授記を得
て十パーラミー(波羅蜜)・十ウパパーラミー(近波羅蜜)・
十パラマッタ・パーラミー(最勝義波羅蜜)と三十の波羅蜜
をみたして、ウエッサンタラの身となつて、大地をゆるがす
大布施をおこなつて、妻子をすて、いのち終つてツシタ(兜
率陀)天宮にうまれ、そこに生涯とどまつて、一萬鐵圍山の
天神があつまり、

これときなり汝大雄よ

母胎のうちにうまれよ

人天を濟度しつ

不死のことばをさとれ

といわれて、五種の大觀察をおこなつて、そこより死んでシ
ヤカ(釋迦)〔族の〕王家に生を得て、そこにおいて、大いなる
榮華をもつてそだてられ、次第に聰明な青年となり、三つ

の季節にふさわしい三宮殿において、天界の幸の如く、王者
の幸を享け、園に遊ぶためにおもむくおりから、順次に老・
病・死とよばれる三天使を見て、うれいを生じて、引返し、
第四回目に出家者を見て、「よいかな出家」と、出家に對して
よろこびをおこして、園に行つて、そこで一日をすごして、
王用の池の岸邊に坐つて、理髮師の姿でやつて來たウィッサ
カンマ(毗首羯磨)天子によつて、瓔珞をつけられ、ラーフ
ラ(羅睺羅)王子の誕生の知らせを聞いて、子に對する愛情
の強いことを知つて、「これが束縛とならぬうちにそれを切つ
てしまおう」と考えて、夕方都にはいりながら、

げにさいわいなるかなかのほは

げにさいわいなるかなかのちち

かかるあるじをもてるつまは

げにさいわいなるかな

と、キサーゴータミー(枳薩嬌曇彌)という父方の従妹のと
なえるこの偈を聞いて、「わたくしはこの者によつて涅槃とい
う嬉しいことばをきかされた」と、眞珠の首飾をはずして、
彼女に贈り、自分の宮殿に入つて美しい臥床によこたわつて、
眠りこんだ舞姫の變り様を見て、厭離心を生じて、チャンナ
(車匿)を起し、カンタカ(犍陟)に乗り、チャンナの友た
る〔太子〕は、一萬鐵圍山の諸天神にとりまかれ、大出城を
して、アノーマー(阿奴摩)という河の岸において出家して、

次第にラージャガハ（王舍城）におもむき、そこで托鉢のために
 に行つて、パンダワ（般荼婆）山の斜面で坐り、マガダ（摩
 竭陀）〔國〕王に王事によつて迎えられたが、それをことわつ
 て、「全知の域に達して自分の國に來るように」と約束をさせ
 られて、アーラーラとウツダカのもとに行き、かれらのもと
 で到達せられた奥義を見ないので、こころみたされないで、
 六年間大苦行をおこなつて、ウイサーカー〔星宿〕と満月〔の
 會う〕日の朝早く、スジャーター（善生）の施した乳粥をた
 べて、ネーランジャラー（尼連禪）河に金の鉢を流し、ネー
 ランジャラーの岸にあるマハー・ワナサンダ（大林）に日中
 をすごして、夕刻にソッティヤ（吉祥）〔童子〕によつて施さ
 れた草⁽¹²⁾をとり、カーラ（迦羅）龍王によつて、徳を讃えられ
 た〔菩薩〕は菩提道場に立つて、草⁽¹²⁾をひろげて「解脱によつ
 て汚漏^{おろ}よりこころが解き放たれるまでこの結跏趺坐を解くま
 い」と誓いをたてて、東にむかつて坐り、日の沈むまゝに魔
 軍を打破り、初夜に宿住智・中夜に生死通に達し、後夜を終
 ったときに、緣起智に下りて、十力・四無畏⁽¹³⁾その他のすべて
 の徳に飾られた一切智をさとつて、七七〔四十九〕日を菩提
 道場にすごし、第八七日目にアジャパーラ・ニグローダ（阿
 踰波羅尼拘律）樹の根もとに坐つて、省察によりて、法の深
 遠なるために、消極的に過されていたが、一萬鐵圍山の大梵
 天たちにとりまかれた娑婆世界主梵天によつて、説法を乞わ

れた〔佛陀〕は、佛眼をもつて世界を觀察し、また梵天の願
 いを入れて、「わたくしは最初にだれのために法を説こうか」
 と觀ながらアーラーラとウツダカの死んだことを知り、五群⁽¹⁵⁾
 比丘のはなはだ役立つてくれたことを思い出して、座より立
 たれて、カーシ〔國〕の都へおもむきつつ、途中にウパカ（優
 波迦）とともに相語り、アーサールハ月（阿沙陀）月満月の日⁽¹⁶⁾
 にイシパタナ（仙人墮處）ミガダーヤ（鹿野苑）なる五群比
 丘の住處に至り、ふさわしからぬ振舞をしているのを知ら
 せになり、アンニャコンダンニヤ（阿若憍陳如）をはじめ、
 一億八千萬の梵天たちに甘露をのませて、法輪を轉じつつ、
 最もすぐれた法輪を轉ずる〔佛陀〕は、分月⁽²⁰⁾の五日に、すべ
 てかの比丘らを羅漢果に安立させ、その日に良家の男子、ヤ
 サ（耶舍）が機根の熟しているのを見て、厭うて家を捨てて
 出たのを、「きたれヤサよ」と呼ばれて、その夜のうちに預流
 果に至り、翌日阿羅漢果に到達させ、他にかれの友五十四人
 のひとびとを「きたれ比丘らよ」の出家法によつて出家させ
 阿羅漢果に至らせた。

かくの如く、この世間に六十一人の羅漢ができたときに、
 雨安居をすごした〔世尊〕は自恣をおこない、「比丘らよ行脚
 せよ」と六十一人の比丘らを諸地方につかわして、自身はウ
 ルウェーラ（優樓頻螺）へ行かれながら、途中、カッパシー
 カ（綿樹）の叢林で、三十人のバツダワツギヤ（賢衆）の公

子らを轉教させた。かれらの最もおくれたものは預流〔果〕、最もすぐれたものは不還〔果〕に至つた。〔佛陀は〕またかれらのすべてを「きたれ比丘よ」と出家させ、地方に送られた。自身はウルウエーラへ行かれて、三千五百の神通を示し、千人の結髮道士を連れてくるウルウエーラカッサバ（優樓頻螺迦葉）らの三人の兄弟の結髮道士を「きたれ比丘よ」の法によつて出家させ、ガヤーシーサ（象頭）山に坐らせて、燃焼方便の説法によつて阿羅漢果に安立させて、かれら千人の阿羅漢にとりまかれ、ピンピサーラ（頻毘娑羅）王にあたえた約束を果そうと、ラージャガハ（王舎）城の附近にあるラツティワナ（杖林）に行かれ、「佛が來られた」と聞いて、十二萬の婆羅門や居士とともに來た王のために、甘美な説法をなさりながら、王を十一萬の「ひとびと」とともに預流果に立たせ、一萬のひとびとをば「三」歸依に安立せしめて、翌日、儒童（青年）の姿をした帝釋天王に徳を讃えられて、ラージャガハ（王舎）城に入つて、王宮で食事をすませ、ウエールワナ（竹林）精舎を受納せられ、そこに住まいをせられた。そこでサーリプッタ（舍利弗）モツガッラーナ（目犍連）がかれ（佛陀）のもとに參じた。

これがそこにおける次第説話である。佛陀がまだ世にお出ましにならないころ、ラージャガハに近く、ウパティッサ（優波帝沙）村、コーリタ（拘栗）村と二つの婆羅門村があつた。

そのうちウパティッサ村でルーパサーリー（鸚鵡）となすける婆羅門婦が身重になつた日に、またコーリタ村ではモツガリーという婆羅門婦が懷妊した。この二つの家は七代續いて親しい交りをしている友だちであつた。かのふたりに同一日に胎守たいまもりを授けた。かの女らはふたりとも十ヵ月を経て、男の子を生んだ。名つけの日にサーリー婆羅門婦の子にはウパティッサ村の名家の息子とて、ウパティッサと命名した。一方にはコーリタ村の名家の子とて、コーリタと名をつけた。かれらはふたりともに成人してあらゆる學藝に通達した。ウパティッサ青年が遊ぶために河、あるいは園に行くときには五百の金の轎が伴をした。コーリタ青年には、身分のいい「子弟の」五百の車が「供を」した。ふたりにはまた五百人宛の青年の隨伴者があつた。ラージャガハには毎年、山頂祭（23）というものがあつた。かれらふたりのためにもまた一つの場所に座席を組んだ。ふたりはまた一緒に坐つて、見せものを見、笑うべきところでは笑い、悲しいところでは悲しみをおこし、心付けをあたえるにふさわしいところでは心付けをあたえた。かれらはこのようなやりかたである日見せものを見物しながら、智慧が熟していたために、前の日のように、笑うべきところで笑い、あるいは、悲しむべきところで悲しみをおこし、あるいは「心付けを」あたえるにふさわしいところで心付けをしなかつた。しかるにふたりともこう考えた。「こ

これにおいて見ねばならぬなものがあるか。こんなものはことごとく百年たたぬうちに、あつたかなかつたかわからぬようになつてしもうである。われわれは一つの解脱法を求むべきである。」という目的を抱いて坐つていた。それからコーリタがウパティッサにいつた。「おいウパティッサよ、きみはほかの日のように、うれしがつてよろこばないようだね。なにを考えているのだ。」「ああコーリタよ、これらを見物しても、本質というものはない。これは有益なものではない。自分の解脱の法を探さねばならないと考えながら坐つてゐるのだ。しかしきみはまたなせたのしがないのだ。」かれもまたそのように言つた。

そのとき、かれの自分とともにひとつのねがいを抱いてゐることを知つて、ウパティッサは言つた。「われわれはふたりともいいことに氣がついた。しかるに解脱法をもとめるのはひとりの出家を得ねばならぬ。だれのもとに出家しようか。」

しかるにそのとき、遊行者サンジャヤ（²⁶刪闍耶）がラージャガハに住んでいた。多數の遊行者の随伴者と一緒であつた。かれら（ウパティッサとコーリタ）は「かれのもとに出家しよう」とて、五百人の青年たちに「轎と車を持つて行つてくれ」と暇を出し、五百人とともにサンジャヤのもとに出家した。かれらが出家したときからサンジャヤは所得が多く

なり、また名だかくなつた。「ふたりは」數日のあいだにサンジャヤのすべての教理を論破して、「師よ、あなたさまのおきわめになられた教理はこれだけでございますか、それともまだ奥がございますか」とたずねた。「これだけである。きみらは全部を知られたのだ」といわれて考えた。「このようである、このひとのもとので梵行生活は益がない。われわれは解脱法をもとめるために世を捨てながら、それをこのひとのもとは得ることができない。インドは廣い。⁽²⁸⁾村や町や王市を歩き廻れば、たれか解脱の法を説く師を得るであろう。」それからちそこかしこに「賢者・沙門・婆羅門がいる」といえば、そこかしこにおもむいて議論した。他のひとびとはかれらによつて質問された問いに答えられなかつた。しかるにかれら（ふたり）は他のひとびとの問いに對して答えた。このようにして全インドを遍歴して還り、自分のところに戻つてきて、「おいコーリタよ、わたくしたちのうちで最初に不死を得たその者は一方の者に知らせるのだよ」と約束した。このようにかれらが約束をして日をおくつてゐるときに、佛陀はまえにのべたように、次第にラージャガハに到り、ウェールワナ（竹林）〔精舍〕を受納せられて、ウェールワナに住んでおられた。そのとき、「さきに」「比丘らよ、多くのひとびとの利益のために行脚せよ。」と三寶の徳を説くためにつかわされた六十一人の阿羅漢のうち、五群〔比丘〕のなかの

アッサジ（馬勝）大長老は、ふたたび還つて来てラージャガハにきたり、翌日朝早く衣鉢を取つて、ラージャガハに托鉢のために入つた。そのとき、朝早く遊行者ウパティッサは食事をして遊行者の道院に行きながら、長老を見て、考えた。

「わたくしはこのようすがたをした出家をかつて見たことがない。こんなのは世間においては阿羅漢、あるいは阿羅漢道に入つたものである。これはかの比丘らのひとりである。

よしわたくしはこの比丘のまえに行つて、『友よ、あなたはどなたについて出家したのですか。あなたの師はどなたですか。あなたはどなたの法をよしとせられるのですか。』とたずねて見よう。」そのときかれはこう思つた。「この比丘に質問をするのには時を得ていない。家々の間に入つて托鉢のために歩いてゐる。ではわたくしはこの比丘にあとからあとからついて行こう。求めるものの心得てゐる道である。」かれ

（ウパティッサ）は長老が團食を得て、ある空地に行くのを見て、かれの坐りたいことを推察し、遊行者の座席を設けて差上げた。また食事の終つたときにかれに自分の壺で水を施した。このように師に對する勤めをして、食事の終つた長老とともに、氣持のよい挨拶をかわして、このように言つた。

「友よ、あなたの諸根はまことに輝いています。皮膚の光は純潔で清らかであります。友よ、あなたはどなたについて出家せられたのですか。あなたの先生はどなたですか。あなた

はどなたの法をよしとせられるのですか。」とたずねた。長老は考えた。「これらの遊行者というものは、教の法敵である。このものに教の奥深いことを見せてやろう」と自身が新しい出家であることを示しながら言つた。「友よ、わたくしは新しく、出家して久しく日のたたないものです。この教法には新參者であります。ですからわたくしはくまなく法を説くことはできません。」遊行者は「わたくしはウパティッサとなすける者です。あなたのお力の範囲で多くもまたは少くもお話してください。これを百の方法千の方法をもつてしてもあきらかにするのがわたくしの責務であります」と、考えていつた。

多くもあるいは少くも語りたまえ

われに眞意を示したまえ

眞意のみわれに用あり

附加物はあまたあるもいかにせん

（未完）

1 詳しくはサンジャヤ・ウエーラッタ・プッタ Sañjaya Velatthaputta またはサンジャヤ・ウエーラッティ・プッタ Sañjaya Velattiputta、刪闍耶毗羅瑟智・散若夷毘羅梨沸と漢譯される。六師外道ののひとり、ディイガ・ニカーヤ Dīghanikāya（長部經典）第二經、サーマンニヤ・パラ・スッタ Sāmañña-phala-sutta（沙門果經）第三十一節以下を參照せられたい。

2 現在南方佛教ではディーパンカラ *Dipaṅkara* (燃燈) 佛とそれに續く二十三佛を二十四佛と數え、さらにディーパンカラ佛の前に (一) タンハンカラ *Taṇhankara* (作欲) 佛・(二) メーダンカラ *Medhankara* (作慧) 佛・(三) サラナンカラ *Saraṇankara* (作依) 佛の三佛をおいて二十七佛とし、最後のカッサパ *Kassapa* (迦葉) 佛のあとのゴータマ *Gotama* (瞿曇) 佛まで數えて過去二十八佛という。

3 原始佛教・南方佛教では北方佛教の六波羅蜜とちがつて、十波羅蜜である。すなわち、(一) 布施・(二) 持戒・(三) 出離・(四) 智慧・(五) 精進・(六) 堪忍・(七) 眞實・(八) 決定・(九) 慈・(一〇) 捨がそれである。

4 パーリ文のジャータカ *Jātaka* (本生經) 第五四七、ウェッサンタラ・ジャータカ *Vessantara Jātaka* (南傳大藏經第三十九卷・第二六一頁以下、高田修譯、毘輸安咀囉王子本生物語) を見られたい。また倉田百三作「布施太子の入山」も同じ本生物語を材料としたものである。

5 五種の觀察というのは菩薩が兜率天から下つて母胎中にやどるのに適した (一) (時機)・(二) 國土・(三) 地方・(四) 家系・(五) 母親およびその壽命の長さについての吟味をいう。

6 インドやその周囲の東南アジア諸國においては一年を三季節にわけて考える。ワッサ *vassa* (雨季)・ヘーメント *hemanta* (雪季すなわち冷季)・ギムハーナ *gimhāna* (暑季) の三季である。

7 續柄・系圖等あきらかでないが、父王スッドーダナ *Sud-dhodana* (淨飯) の姉か妹の娘らしい。

8 キサーゴータミーの唱えた偈の原文は次の如くである。

Nibbutā nūna sā mātā
nibbuto nūna so pitā
nibbutā nūna sā nārī
yassāyam idiso pati ti.

これを見るとニブタ *nibbuta* ということばが三度もくりかえされていることに氣がつく。キサーゴータミーは「さいわいなる」の意味でうたつたのに、出家者に出逢つてこのかた、涅槃ということで頭が一杯になつていたシッダッタ王子には涅槃という意味にとられたわけである。南傳大藏經第二十八卷第一二九頁—一三〇頁にはこのことに關する立花俊道師の見解がのべられている。

9 アーラーラカラーマ *Āḷarakalāma* (阿羅羅伽羅摩) の略、求道時代のゴータマはかれより空無邊處の説をきく。

10 ウッダカ・ラーマ・プッタ *Uddaka-Rāma-putta* (ラーマの子ウッダカの意) 音略して鬱頭藍弗と漢譯してある。非想非非想處を説く。

11 原語は *visakhapuṇṇamadvase* である。ヘーベード・オリエンタル・シリーズ第二十八卷のバーリンゲイム氏の翻譯 (*Harvard Oriental Series volume twenty-eight, Buddhist Legends, translated by Eugene Watson Burlingame, p. 196.*) には *on the day of full moon of the month Visakhā* となっているが、*visakhā* が月の名であるならば、*vesākha* になればならない。意味は結局同じことになるから、さしつかえや間違いはおこらないけれども、ことばを嚴密に吟味している

ならば、visākhaは星宿の名として理解されなければならない。すなわちこの星宿は西洋天文学でリーブラLibra(てんびん座)とよばれ、支那天文学で氐宿といわれ、漢譯佛典では善格宿とも譯されている。南方佛教の傳承に徒えば、佛陀の成道はこのてんびん(天秤)座と満月の合う月、すなわち、ウェーサーカ vesākha(吠舍法)月の満月の日にゴータマ佛陀は成道したと信ぜられている。この點で日本の佛教徒のおこなつてゐる十二月八日の成道會とは日が異なるわけである。このように星と月との關係できまるのであるから、今日の太陽曆の何月何日にあたるのか、毎年ちがうので直ちに明言することはできないが、だいたい五月頃の満月の日である。南方佛教では、成道だけでなく、誕生も入涅槃もともにこの日であると信ぜられてゐる。

12 草とは原文に *tīṇa* (草) とのみあつて、わが國で傳える吉祥草、すなわちパーリ語の *kusa* サンスクリットの *kuśa* (學名 (*Poa cynosuroides* Retzuis) の名は見えない。

13 無畏の原語は *vesāraja* である。確信・自恃というような意味である。

14 「山羊を守るニグローダ樹」の意である。ニグローダ *nigrodha* はサンスクリットの *nyagrodha* であり、學名 *Ficus bengalensis* Linnaeus 英名を *Banyan tree* とよばれる。枝から氣根を垂れ、それが新しい幹となつてひろがるので、一本で一里にも及ぶことがあるという。

15 求道時代のゴータマと苦行をとにした道友たち、(一) コンダンニャ *Koṇḍañña* (橋陳如) (二) マハーナーマ *Mahānā-*

全譯上首弟子物語(東 元)

ma (摩訶那摩) (三) ワッパ *Vappa* (婆破) (四) バッディヤ *Bhaddiya* (跋提) (五) アッサジ *Assaji* (馬勝) の五人

16 原語カーシプ *Kāśipura*、すなわちカーシ國の都とは、現在のベナレス、古代のバーラーナシー *Bārāṇasī* (婆羅痾斯)、バラナ川とアシー川にはさまれた土地故にバーラーナシーとよぶ。

17 アーサルハ *Āsālha* 月、インド曆の第四月、太陽曆の七月頃にあたる。西洋天文学の *Sagittarius* 中の星、支那天文学では箕宿にあたるサンスクリットの *pūrvaśāḍha* *purvāsāḍha* と、また斗宿にあたるウッタラーシャーダ *uttarāśāḍha* と満月の合う月。

18 イシバタナ *Iśpatana* は現在のベナレスの北方三マイル半、サールナート *Sārṇāth* のダメク *Dhamek* とよばれている地である。

19 五比丘たちはこのとき佛陀を、ポー・コータマ *Bho Gotama* 「おいゴータマよ」と俗姓でよんだ。

20 分月の五日とは、ここでは陰曆二十日のこと、五比丘と佛陀が出逢つたのはアーサルハ月の白分満月の日であり、それに續く黒分第五日の意味である。

21 ウルウェーラ *Uruvelā* はマガダ *Magadha* (摩竭陀) 國ネーランジャラー *Neranjara* (尼) 連禪河畔にあり、佛陀にとつては、六年にわたる苦行および成道のなつかしい思い出の地、鹿野苑より一八ヨージュナ(由旬)の距離にある。

22 カップパーシカ *Kappāsika* はかりに綿樹と譯しておいた。チャールス・カルテル *Charles Carter* 氏のシンハリーズ・イン

グリッシェ・ディクシヨナリー *Sinhalese English Dictionary*によれば、セイロン語でカプ *kapu* またはカプガン *kapugaha* とよばれる植物は、英名をシルク・コットン・シリール *Silk cotton tree* あるいはボンベクス *Bombax* といわれるが、その學名は *Bombax malabaricum* De Candolle であり、和名をマタンキ・パンヤノキという。ここでいうカッパーシカとはあるいはこれかと思う。モニエル・ウィリアムス *Monier Williams* 氏の梵英辭典にはカルパーサ *karpāsa* の項にザ・コットン・シリール *the cotton tree* とあり、*Gossypium Herbaceum* (Linnaeus) という學名を掲げている。これは和名をワタといひ、一年生草本であつて、叢林とよばれるような植物ではない。金平亮三氏はその著有用熱帶植物誌に學名を *Eriodendron anfractuosum* DeCandolle とよばれる植物が、英名をカボック・シリール *karpok tree* またはシルク・コットン・シリール *silk cotton tree* 和名をカボックということを書いてゐる。ここでいうカッパーシカはこれらのどれであるか、いまだちにきめることはむずかしい。ラルフ・リリー・ターナー *Ralph Lilley Turner* 氏の *A・コンパラティヴ・ア・インド・エティモロジカル・ディクシヨナリー・オブ・ザ・ネパール・ランゲージ* *A comparative and etymological Dictionary of the Nepali Language* (比較・語原學的ネパール語辭典)にはカパース *Kapās* の項にネパール語のこのことばがパーリ語のカッパーシー *kappāsī* と同一視されている。なるほどこのカッパーシーということばは、いまここで問題になつてゐるカッパーシカに近いが、残念ながらターナー氏はわたくしの否定した草本のワタ

Gossypium Herbaceum (Linnaeus) を學名として併せ記してゐるので、都合が悪い、バーリシゲイム氏の英譯には *in Kap-pāsika grove* と固有名詞として扱つており、カッパーシカが何であるかを追究してゐない。ノーマン氏の原典には *Kappā-sikavanasāṇe* とつてある。

23 (一)五百人の弟子をひきいるウルウェーラ・カッサパ *Uru-velekassapa* (優樓頻螺迦葉) と (二)三百人の弟子を有するナディールカッサパ *Nadikassapa* (那提迦葉) (三)二百人の弟子をもつガヤーカッサパ *Gayākassapa* (伽耶迦葉) の三兄弟。24 原語は *dvādasanavuta* なるも、*navuta* は 10^{28} (一〇〇二八乗) であり、現實味のとほしい數である。原著者はあるいは *navuta* すなわち一萬のつもりであろうと推察して *dvādasanavuta* の意味にとり十二萬と譯した。チャールズ・カルテル

Charles Carter 氏に於てギリシヤ語の *navutaya* ヲ「*νῦτ*」フアーランド *McFarland* 氏の指摘したタイ語の *navuta* (*na-hoot*⁴⁾) もつと「一〇〇二八乗」である。The late Rev. Charles Carter, Baptist Missionary in Ceylon: *A Sinhalese English Dictionary*, p. 318, George Bradley McFarland, M.

D.: *Thai-English Dictionary*, p. 445. 参照。

25 原語はギランガサマシヤ *giraggasamajja* (*giri-agga-sa-majja*) 山頂祭の意。王舍城はギンシヤクタータ *Gijjhakūta* (耆闍崛山) 〓わしのみやま)・パンダワ *Paṇḍava* (般茶婆山)・ウヘーバーラ *Vebhāra* (負重山)・イシギリ *Isigiri* (仙人嶺)・ウエープッラ *Vepulla* (廣普山) の五山にとりまかれてゐる。26 遊行者の原語はパリスバージャカ *paribbājaka* 諸國を遍歴す

る僧の意。

27 「論破して」の原語は *parimadditva* である。このペーリ語の動詞 *parimaddati* に相當するセイロン語の動詞は *parimaddanayakaranavā* でありチャールズ・カルター Charles Carter 氏の辭典 *Sinhalese-English Dictionary* には *to rub* となっている。「摩擦する」意味がある。ペーリ語の *parimaddati* に対して *Pali Text Society* の辭典は *to rub, crush, rub off, treat, shampoo, massage* 等の譯語をあたえている。なんだかびつたりこない。そこでこの動詞と關係のあるセイロン語の名詞 *parimaddanaya* に *trituration*. すなわち「粉碎」という意味があることから、「論破」と譯した次第である。

28 原語はジャンブディーパ *Jambudipa* なるも世界説話という閻浮提でなく、インドという意味である。